



## 三木成夫といのちの世界

吉増 克實

### (四) いのちのはたらき、こころのはたらき

かたちからこころへ

前にも述べたように、三木はすがたかたちの解剖学の完成を目指す解剖学者としてこう述べていました。

生物の現象のかたちを通してこころを見ると、前者に焦点を当てれば形態学が、後者に的を絞れば心情学

がそれぞれ成立することになる、と。そして三木の関心は時ともにかたちからこころへと重点を移していったように思われるのです。『胎児の世界』の最後で三木はすでにかたちから離れてこころの問題を直接取り上げています。三木にとって「こころ」とはいったいどのようなものであったのでしょうか。

「こころ。……この本来の意味は何か。わたしたちの祖先は、遠い古代の昔から『コ・コ・ロ』の音色を日常の言葉として延々と使い続けてきたのであろう。それが、漢字の渡来とともに、心臓を形作る「心」の文字に当てられる。この音形象から視形象への翻訳は、彼らが『ココロ』と『心臓』を不可分のものと考えていたことを示す端的な証拠であらう。ここでの『心臓』は、……その独自の運動相貌、絶え間なく続くその拍動の姿に、その本質が求められるのでなければならぬ。『ココロ』とは、従つて、この心拍に象徴される『リズム』そのものであることががわかれる。

……『花鳥風月のこころ』という。それは、人間以外の動植物はもちろん、地水火風の四大にも『こころ』が見られることを言つたものであろう。そこで、いま、この『こころ』を『リズム』に置き換えると『花鳥風月のリズム』となるが、その意味とはもうここでは明らかであらう。花鳥のリズムは『いのちの

波』を、また風月のリズムは『天体の渦流』をそれぞれさす。前者が小宇宙のリズムであれば、後者は大宇宙のリズムとなる。そしてこの両者は、たがいに共鳴し合う。『花鳥風月のこころ』とは、したがつて、森羅万象が『こころを一にして』息づく、まさに宇宙交響の姿をいつたものであることががわかれる。

……ここで、人間の『こころ』について考えてみよう。それはこうしてみれば、大宇宙のリズムと共鳴する、このからだの「内なる」小宇宙のリズムということになる。……生命発生以来延々と営まれていたその宇宙交響のうねりは、このからだの深層で今なお生き続けているのでなければならぬ。自然の『こころ』に感ずる、いわゆる「共感する」というのが、その何よりの証拠ではないか」。

三木の言葉によれば、こころとは何よりも心臓の拍動に表されるリズムそのものであり、こころのはたらきとは私たちの内なる小宇宙のリズムと大宇宙のリズ

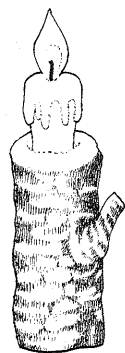
ムとが共鳴することなのです。人間のいのちの中にはそのような深いリズムのつながりが潜んでいて、わたしたちが風や光や四季折々の世界の移り変わりにこころを動かされるまさにそのとき、生き生きと心臓を動かす。

### クララゲス

三木がゲーテに導かれて形態学を進めていったように、心情学を進める上で強い影響を受けた哲学者がいます。それがドイツの哲学者、ルードビッヒ・クララゲスです。その著作「意識の本質」の中で、クララゲスは現象の性格や意味を表す数々の言葉について検討し、それらが常に二重の意味を持っていることを明らかにしています。たとえば「冷たい」という言葉は、からだで感じる氷の冷たさを表わすと同時に、人の態度の冷淡さという意味での冷たさというこころの意味を持つているのです。それは決して単なる比喩ではあ

りません。こころに直接冷たさとして感じられる意味なのです。高い音、低い音という時、決して空間的な意味での高低を言っているわけではありません。高い音は別に高いところから聞こえるのではないのですが、実際に高く聞こえるのです。それが音のこころが直接現われていることなのです。

「色彩や温度、空間属性等々が心情をそなえた人格の記載に役立つのは、それら自体が心情をそなえているからなのである。もし世界に『現象する』のが心情でありそして心情だけであるのでなかったら、心情を世界現象の助けを借りて特徴づけることなど不可能であろうし、また決して試みられることもあり得なかったであろう。現実『それ自体』が、心情をそなえた形象の世界あるいは現象する心情の世界なのである。」「現



象は例外なく生きており、物は例外なく生きていないと付け加えれば正しく理解されるであろうか。体験される形象としてみれば、植物、動物、人間ばかりでなく、岩石、雲、水、風、炎も生きているし、日光の中に見えるほこり、煉瓦、机、星空、それどころか空間も時間も生きているのである。ただ考えられるにすぎない物という意味でとらえれば、これに対して、人間でさえほかの物と同じように、単に機械的に運動する原子の結合にすぎない」。

クラークスによれば、本来の現実世界とは現象の世界であり、現象はすべてこのころをもっている、このころをもっているものはすべてのいのちをもっている、生きているのです。そして三木が取り上げていた花鳥風月のこのころについて言えば、花鳥は小宇宙の生命を表し、風月は大宇宙の生命を表していることになるのです。う。それらはともにいのちの世界を織りなしています。それにしても、現代人にとって、このようないのち

の世界とは日常生活から離れた、まるでおとぎ話か神話の中でのしか出会えないもののように思われるのではないでしょう。事実、自然科学によって産み出された物の世界を基礎にしてわれわれの日常を支える現代文明は築かれてきたのです。わたしたちに親しいのはむしろ物の世界の方かもしれません。あらためて本来のいのちの世界についてよく知るためにはこのころそのものはたつきについても少し詳しく知る必要があります。

#### あたまのころ

三木は人間のころのはたつきについて語るときに、いつも思うという漢字を引き合いに出しました。それはこの漢字の成り立ちがころのはたつきを不思議なほどよく表わしているからなのです。「思」という漢字は二つの部分、上部の田と下部の心とから構成されていますが、上の田は脳の象形文字、下の心は心

臓の象形文字なのです。古代の中国人たちはころのはたらきを脳と心臓とを組み合わせて表わしていたのです。実は、このことは日本語でも同じなのです。日本語の広い意味でのころのはたらきは、「ころ」という言葉で表わされるはたらきと、「あたま」という言葉で表わされるはたらきとに分けられます。そして「ころ」は、先の三木の言葉にあつたように、本来心臓の拍動を意味する言葉であり、「あたま」はひよめき、つまり赤ん坊の時にはまだ閉じられていない頭頂部の大泉門を表わす言葉なのです。

さらに重要なことには、「あたま」と「ころ」のはたらきとは、いわば対立する二つのはたらきを表わしている、取り替えることができないのです。それたとえば「暖かなころ」とは言っても「暖かなあたま」という言い方はないこと、「よく切れるあたま」という言い方はあつても「よく切れるころ」という言い方はないことからわかります。

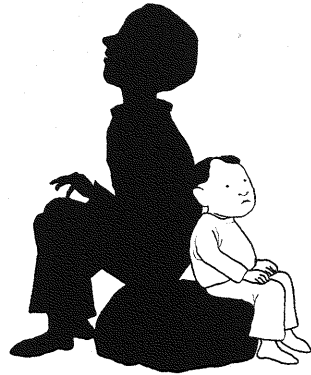
人間は人格のはたらきという観点から見ると、動物一般と共通する生命と人間にしか認められない自我とから構成されています。生命ではころとからだは極性的に連関しています。ころはからだの意味であり、からだはころの現象であると言われるように、それらは互いに切り離すことはできないのです。そこではころは共感と表現の中心、からだは感覚と運動の中心です。それに対して自我はあたまのはたらきに相当するもので、意志と判断の中心を意味しています。つまりあたまところとは、理性と感情、義理と人情など昔から知られている二つの対立するころのはたらきを表わしているのです。

三木はあたまところとの対立を動物性器官と植物性器官との対立、体壁と内臓との対立と関係づけました。脳と心臓とは、すがたかたちの解剖学ではそれぞれ動物性器官と植物性器官の中心をなす器官であつたからです。しかしもともとは動物性器官も植物

性器官もともからだとしてところと極性的に連関するいのちの一部です。あたまの反心情性、反生命的なはたらきの発展には生命の変質、それも動物器官の脳のはたらきの変質を前提にしなければなりません。実は、あたまとところとの対立は、生命の宇宙と歴史的人間の心の中だけに生まれた虚無との対立を表わしているのです。虚無とは、あのミヒヤエル・エンデの果てしない物語に出てくる虚無、つまりこのころの世界ファンタジーエンに押し寄せる「ない」ことです。

### このころのはたらきとところの発達

このころが生き生きとはたらいっていると感じられるのは、世界の出来事にこのころが生き生きと動かされるときです。他者や世界とのつながり拡がりどが感じられできます。世界には孤立しているものはひとつもなく、すべてがすべてとつながっている、連続し連関していると感じられてきます。それは本来わたしたちが



小宇宙として大宇宙のすべてとつながり織りなされていて、このころが動くのはそのつながりが体験として目覚めるだけのことだからです。このころが目覚めると生命の性質、世界の現実的性質が強く共感的に体験されてくるということなのです。

そしてこのころの体験は時とともに世界とともに変化していきます。このころは世界とともに変化することでその意味を共感的に受け取るのです。また同じことの繰り返しはありません。時間は決して逆戻りすることはなく、すべてたった一回きりの出来事としてすぎて

いきます。あるのはリズム的な再生更新だけです。また全く同じものもひとつもありません。ところが強くはたらいっているときには、この繰り返しのなさ、世界の個性性と多様性という世界の性質が、つよく共感的に体験されるのです。

こころの成長は共感する個性的な世界の拡大と共感の深まりとして現れます。それはまず母親に無条件に愛されていることの安心と満足という受動的体験としてはじまります。ここではこころはなおまどろみながらも、愛し手とつながりその愛情を受けいれています。その特定の他者の愛情に気づくことから、特定の他者への愛情体験へと発展します。この愛情体験は他者の喜びへの共感、さらに自分から他者を喜ばせ、その他者の喜びを喜ぶことができるという共感献身体験です。こころが生きていきとはたらいっているときには、この特定の対象には共感者の生命的個性が反映されています。個人的な好き嫌いが反映されるのです。次

に他者との共感体験を前提にして、共感的共同体体験が発達します。この共同体体験は様々の段階的拡がりを示します。共同体内部では共同体を構成する個々の構成員の個性が尊重されます。個性を異にする構成員が交響的に響き合って構成する共同体に対する共感体験です。それはふたりから始まり、家族、仲間、地域の社会的共同体、さらには生きとし生くるものすべてに対する共同体的共感へと広がっていきます。最後に生命的現実それ自体に対する共感に至ります。それは生も死も大宇宙のリズムの中に織りなして再生更新する宇宙の根源リズムへの共感です。

### あたまのはたらきとあたまの発達

宇宙のすべては時とともに変わり続けています。それに対して変わらないものがただひとつだけあります。虚無、「ない」と言うことです。「ない」には変化も、どんな質的な相違もありません。それだけでは現

象不可能な「ない」が人間の心の中にやどって新たな作用中心を形成したのが自我です。生命化された虚無としての自我にとって生命的現実の世界は自分とはまったく異質なものの、理解不可能、支配不可能な抵抗として現れてきます。自我は世界にはたらきかけて、虚無を実現しようとします。その現れが、抵抗としての他者や世界への破壊衝動であり、支配欲です。あたまは即座の願望実現を妨げる抵抗としての時間を憎みます。ひたすらスピードが追求されます。変化する世界と時間との関係を絶つことで不変の形式を求めます。自我は個性を憎みます。世界のすべての個性を奪われたただの数値になり、画一化されます。質の代わりに量が追求されます。速く、たくさんのがだれにでも一律に実現できることがあたまの目標です。

あたまの発達はむき出しの自己中心的な攻撃欲からその完全な抑制に向かう過程です。感覚的満足の追求から始まり、意志の万能の追求、暴力による他者の支

配、ルールを前提にしたエゴイズムの競争における成功追求、エゴイズムの完全な抑制と他者の絶対的尊重と平等、さらに法則とイデオロギーにもとづく物の世界、観念の世界へと向かいます。

### こころの世界へ

こころのはたらきは基本的には受動的なものです。それはもともとひとつの世界に織りなされている他者や世界とのつながりに目覚め、はたらきかけてくる別のこころにこころが感応しからだか動かされる体験です。それに対してあたまのはたらきはもっぱら能動的で、それは孤立した中心としての自我から他者や世界へ一方的にはたらきかけるのです。確かに、ないものに向かって努力できるのは人間だけなのです。こころに導かれるとき、努力は目標への特急切符になります。しかし、こころに導かれるのではなくれば、終着駅は闇雲の破壊になるよりないのです。



ところが不安や空虚感に襲われるとき、あたまは努力して自我目標の実現によってそれを克服しようとしてがんばります。しかしどれほどがんばっても、それではこのころの満足は得られません。このころを動かすのはこのころしかないからです。自我目標はそれ自体としては本来何の現実性もたない幻影にすぎません。それは努力によって追求できない生命目標を実現するための仮の目標にすぎないのです。生命目標が見失われ、快樂であれ、権力、金、名誉であれ、自我目標がそれ自体として追求されるようになると、行動はすでに神経症化しているといってもよいかもしれません。それどころか自我の基本的なはたらきは、このころからだを動かさずに「楽をして」目的を達成することなのです。あたまのはたらきがこのころのはたらきに先立つところをはたらかなくなるのです。

このころの世界が本来のいのちの世界であり、物の世界はあたまによって作りだされた仮象の世界です。い

のちの世界はこのころが生き生きとはたらくときに初めて現れてきます。いのちの世界と心を通して生き生きと生きるためにはこのころを守り育てることが大切です。そして、能率よく、速く、簡単に、手間ひまかけずにたくさんものを求めるというあたまのやりかたでこのころを育てることはできません。共感するこのころの喜びを大切にすること、それぞれのこのころに働きかけてくるものひとつひとつを、それぞれのこのころとからだを動かして大切に作る生き方がこのころを育てるのです。

(東京女子医科大学第二病院)